
学会賞受賞報告

優秀文献賞『「思い出」をつなぐネットワーク

—日本社会情報学会・災害情報支援チームの挑戦—

…「それだけは、美しく切り出されてはならない」—震災研究の3条件—

We Must not Allow “it” to be Colored by Emotion.

—Three Precondition of the “Quake Research”. —

The Salvage Memories On-Line :

Analysis of Disaster Recovery Supports by Information Technology

津田塾大学 柴田 邦臣

Tsuda College Kuniomi SHIBATA

1 「写真」, 「研究」, “共感”

「周りにある本の中で、一番〈ありえない〉研究書をつくろう」という意図で、本書は企画されました。その理由は2つあります。まずひとつめは、「通常の研究書では、あの2011年の大震災を描くことができない」、と考えたからです。

一番良い例えとして、本書の目的である「研究」と、本書の主題である「写真」との違いを挙げることができるでしょう。震災後これまで、私たちは数えきれないほどの被災に関する写真を目にし、その全てに心を打たれてきました。失われたつあった被災前の思い出、涙無しには見られない被害、逞しく復興する被災者、献身的で善意溢れるボランティア……。それらは写真として切り取られ、“被災地の真実”として、私たちの圧倒的な

感動と賞賛を呼んできました。それは、ある意味で当然なのかもしれません。写真とはそもそも、リアリティを悲劇や美談として切り取るような表現技法だからです。しかし無理矢理例えてみれば、私たちが求める「研究としてのリアリティ」は、「そのよって立つ根拠を儀礼におくかわりに、別のプラクシスすなわち政治におく」(Benjamin 1936/55=1999: 20) ような写真芸術の裏側、つまり、「切り出されなかった」後景の方にこそ、存在するはずなのです。

被災写真や「思い出サルベージ」の話をすると、どんな人も3分ぐらいで「うんうん」と頷いてくれる。被災地の写真を見せたりすると、涙を流して共感してくれたりする。しかし、被災地の問題は、私が知る狭い範囲でさえ、そんな単純なものではありません。そんなふうに理由無く“共感”さ

れてよいものではないのです。簡単に“共感”されたり、無条件で同意されたりされてしまうからこそ、逆に本当の問題が見過ごされたり、復興がうまくいかなかったり、遂には簡単に忘れられたりしてしまうのではないかと。

その意味で、本書が対象にした「写真」、そして「映像」というものは、危険な魔力を秘めていました。被災地において“共感”を呼ぶアングルを決めることは、思ったほど難しくない。献身的で善意に溢れた支援を“装う”ことも、容易いといってもよい。そしてそれが人の心を（半ば計算通りに）打って“共感”をよんだ場合、むしろ重要な問題は、アングルに入らなかった方・写真のフレームに切り取られなかった方の、量と質にあるのではないかと。

簡単にアングルに切り出せない方こそが現実で、だから深刻なのです。私たちが求めているのが震災の「支援」ではなく、震災の「研究」なのであれば、その種の切り出されたような“共感と賞賛”に基づいて議論をしてはならない。

エドワード・サイードは、「学問は、活動というより制度そのものであり、研究対象を統制し、標準化する」ものだと述べています（Said 1981＝1996：169）。だとすれば被災地研究を、ITや、ボランティアや、支援者の“美しい物語”として描くことには、可能な限り慎重に、謙虚でいなければならないでしょう。当時も今も被災地では、語られること・語られないこと・語りえないこと、さまざまな逡巡が存在しているのです。正直に言えば本書の私たちの話だって、少なくとも成功談ではないし、格好良く描かれるような話ではありません。今なお艱苦する被災地に正対するのであれば、それを素材として彩管を揮うような研究ではなく、フレームに切りだしにくい方を刻苦に直視する作業が必要なのではないか、と思うのです。少なくとも震災研究だけは、美しく切り出されてはならない。

私たちが考えるべきなのは、むしろ「被災地の

中で感じられるような、わかりにくさ」と、その対極である「東京で（被災地外で）感じられるような、わかりやすさ」とのギャップなのではないのでしょうか。本書ではそれを、〈違和感〉と書きました。わかりやすい“共感”ではなく〈違和感〉の方を、しかも違和感をもったまま書こうとした無謀さが、本書を〈ありえない〉ものにしてしまった源泉なのかもしれません。

2 「architectism」と「literacism」

本書の“ありえなさ”のもうひとつの素因は、私たちの「内」にあります。赤面するほどの自分語りしかしていない拙著に意味があるとしたら、それは、巷間で散見する“美しい活動の話”として語らなくても、むしろ批判し自省する立場からこそ、「情報技術を活用する主人公としての被災当事者」を、描くことができること、そのことに気がついた点にあったといえるでしょう。

「被災地と情報技術」という観点でいえば、最新の防災技術や、SNSでのボランティア活動など、格好良いメディア利用がマスコミ等でいくつも取り上げられました。しかし少なくとも私が見聞きする限りにおいては、局所的に役立った数例はあってもその成果は限定的で、たいていは、東京で喧伝されているほどには貢献していませんでした。思い出サルベージも写真洗浄も、外部評価はともかく、「正直に言えば救えなかった方が多い」ような、普遍化には無理がある類いのものだといえるでしょう。なにしろ被災地は日本有数の過疎地で、多くの方が65歳以上であり、ネットはおろかケータイもあまり使わないという方が少なくありません。そもそも顔見知りばかりの田舎ですから、そんなもの無くても十分コミュニケーション可能な、極めてインタラクティブな〈場〉が存在していたのです。仮設や公営住宅で孤立を深め復興計画に分断されている今でも、なお被災地を支え救っているのは、結局はそのような地元の〈繋が

り〉でしかありません。本書の内容は、支援者として罷り出た私たちの理想が次々と裏切られ、一方で地元の人々が少しずつ、しかし着実に情報や技術を活かして〈繋がり〉を生んでいく過程です。

しかし今でも、マスコミや（一部の）研究者に切り出される“偏った先進例”の前景は、あたかも何か新たな「社会運動」のようなものが生まれて、情報技術がそれを支えて、被災地を復興させるという“大きな物語”を現出させます。自省すれば私自身、ボランティア勧誘や資金獲得のために、その種の共感ストーリーを多用していました。もしも私たちが「社会運動」に見えたとしたら、それは“思い出の被災写真”という感傷的イメージと、“総デジタル化”というテクノロジーのセンセーションを梃子とする“作られた”ものでしかありません。本書の〈違和感〉は、そのような偉大で空虚な“支援者のBildungsroman”的なものに対する自戒といえるでしょうが、同時に、「社会」と「情報」をめぐる物語—まさに社会情報学のメインテーマ—に向けられたものでもあります。

このような立場から、社会と情報をめぐる物語の潮流を整理すると、二つに分かれます。ひとつは被災地を支援し復興させるようなテクノロジーを設計したり、運用制度をデザインしたりするという立場です。そのような「有用で良心的で美しい設計やデザイン」が存在しうると考え、その理想をめざす姿勢をarchitectismないしはdesignismと呼ぶとすれば、当事者・利用者によるメディアやテクノロジーの、予想外・計画外の活用といったような地道なリテラシーに期待する立場を，literacismないしはuserismということが出来るかもしれません。社会情報学は、現在、その理想と現実の葛藤のただ中にあります。

もちろん、この両者は背反するものではなく、程度の差はあれ、どのような研究でも併せ持っています。しかし、それがめざすものが震災研究なのであれば、私たちはarchitectismではなく、努めてliteracismの側に立たなければならない。東京の

人間が外から、まるで図面を引き直すかのように復興をデザインすることは、ただでさえvulnerableな被災地の「内」なる繋がりを圧迫・屈折させたり、再び喪失させたりすることになりかねません。現に東北沿岸で乱舞するコンサル会社が描き出した“復興計画”は、今まさに被災地の内的な歴史の積層を、切り裂きつつあるのです。

ジャン＝リュック・ナンシーがフクシマ後を指していう「存在するあらゆるものを潜在的にはすべて従属させる世界」(Nancy 2012=2012: 55)は、「それによる過去や未来の時間の見積り、骨董品の堆積や計画の構築」(Nancy 2012=2012: 69)に由来しています。よりによって震災支援の研究が、その尖兵を務めることだけは、許されるべきではないでしょう。

3 「震災研究の3条件」

そう考えてみてはじめて、本書結論の第5章での〈違和感〉に、それなりの解答を出すことができると思います。つまり「震災支援研究」は、3つの条件を満たさなければならなかったのです。

条件1 震災研究の「当事者性」…5章4 (2)

「人をめぐる違和感」から

その研究の主人公は、第一に被災当事者でなければなりません。それは単に「被災者のためである」ということだけではなく、「当事者に依存する専門家を生み、当事者への強制を生む」(本書: 289) ことを避け、当事者の自己決定を支えるようなものでなければならないでしょう。

条件2 震災研究の「妥当性」…5章4 (3)

「テクノロジーをめぐる違和感」から

その研究が被災地にとって必要で有用であることは当然です。しかしながら「被災者の役に立った」とか、「被災者に感謝された」とかといった「評価するための成果主義」(本書: 293) には批判的

であるべきです。研究の妥当性は瞬間的に個別に決まるものではなく、通時的に、相当適度に普遍的に、まさに被災地内でのコミュニケーションの中で定まってくるものであり、それに自省的でなければなりません。

条件3 震災研究の「内在性」…5章4 (4)

「コミュニティをめぐる違和感」から

その研究は、「復興の物語」という、美しくやさしく、それでいて単調で一方向的な調べ(本書：293)に寄与するようなものではあってはいけません。震災研究は、優れた支援であればあるほど「一人ひとりの固有の、しかも多様に層状に積み重なる物語」(本書：293)と、齟齬を起こしかねないことに、自覚的でなければならないでしょう。

この段階で解答を出している時点で、本書もまた、上記の3条件を十分満たすことができなかった失敗作であることを、白状してしまったのかもしれませんが。しかしながらこの3条件は、多かれ少なかれ、「震災研究」を名乗るものの大半に、求められているのではないのでしょうか。少なくとも「震災」を素材に研究するのであれば、満たさなければならない最低条件で、しかし簡単には満たせない〈試練〉であると思うのです。

さらにいえばこの姿勢は、リアルな社会に情報技術という変革装置を適用しようと構想する、社会情報学にこそ、求められているのではないかと感じます。設計図引きはもちろん、大上段に構えた調査分析や純粋無垢な技術開発・評価なら、他の学会でもすることができます。しかし、社会や人間の関係性に影響を与えうる情報技術の、設計や論理を、慎重に、妥当に、そして内在性を尊重しながら議論し活用しようという地平を、社会情報学以外のどの学問が、私たちに示してくれるのでしょうか。この〈試練〉は、社会情報学にとっての〈試練〉ともいえるのではないのでしょうか。

本書は元々、共時的な社会情報学における“試練

の世代”にむけて企図されたものでしたが、そのターゲット設定も間違っていたかもしれません。その試練は広く「震災研究」に問われています。その克服はおそらく、まず「社会情報学」によってなされるべきでしょう。そして、その時の社会情報学は、他の学会には持ちえない、固有の、妥当で、しかも誠実なディシプリンを確立していることでしょう。私たち本書筆者は、社会情報学の今後に、強く期待しています。

末尾になりましたが、本書にご寄稿くださった皆様、出版してくださった昭和堂の皆様に御礼申し上げます。このような私たちをご指導くださっただけでなく、望外の荣誉までいただきました社会情報学会の先生方、ともに活動してくださったボランティアの方々、ご支援くださった企業・団体、そしてなによりも、被災地・山元町の皆様に、深く感謝申し上げるとともに、真の復興を強く祈念申し上げます。その一助となれば幸いです。

最後に私事で恐縮ながら、受賞のすべてを、昨年急逝されました前「思い出サルベージ」共同代表、故星和人氏に捧げます。この賞もまた、あなたのものです。どうもありがとうございました。

参考文献

- Benjamin, W., 1936 Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit, (= 1999, 高木・高原訳『複製技術時代の芸術』晶文社).
- Habermas, J., 1992, Faktizität und Geltung, Suhrkamp. (= 2002, 河上・耳野訳『事実性と妥当性——法と民主的法治国家の討議理論に关する研究(上・下)』未来社).
- Nancy, J.L., 2012 L'Équivalence des catastrophes (Après Fukushima), Galilée. (= 2012, 渡名喜訳『フクシマの後で：破局・技術・民主主義』以文堂).
- Said, E. W., 1981, Covering Islam, (= 1996, 浅井・佐藤訳『イスラム報道』みすず書房).